

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2010年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	日本文学専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・日本文学専攻 博士課程前期課程3年	三宅 由佳	印
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学部・教授	小峯 和明	印
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名
研究課題名	中世文学にみる音楽—『文机談』を主軸に—		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
研究期間	2010	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

文章や絵画といったメディアに表れる音楽享受の様相を明らかにし、音楽を通じた日本人の思想や姿勢を見通すことを大きな目的としている。今年度は、鎌倉時代成立の琵琶相承の物語である『文机談』を中心に取上げた。近年研究が活発になってきているが、伝本間の関係について論じたものが多く、また細部に着目した論が多く全体像を明らかにするのは未だこれからの状態である。よって本研究では、『文机談』の作品世界の全体像をつかみつつ、文学に描き出された芸道の実態について考察した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 音楽説話 } { 琵琶楽 } { 相承 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

『文机談』は、琵琶の伝授系譜を豊かな説話を交えて語った鎌倉期成立の琵琶相承の物語である。伝本は京都大学附属図書館菊亭文庫本系統と、宮内庁書陵部蔵伏見宮本の二つに大きく分けられるが、伝本間の関係はいまだ明らかになっていない。今年度は現存する諸本の調査を行い、その関係性に新たな考察を加えることを目標とした。西尾市立図書館岩瀬文庫、静嘉堂文庫、東京大学史料編纂所などを中心に諸本の調査を行った。しかし、現存する諸本の中では最古とされる京都大学本が修復中のために閲覧がかなわなかった。そのため調査としては不十分であったため、二つの伝本の本文比較を中心に取り組んだ。結果的に両者の間に新たな関係性を見出すには至らなかったが、本文比較をすることによって楽人同士の関係の描かれ方に相違があることが見えた。今後も、原本にあたる調査を進めると同時に本文比較が重要になってくるだろう。

また、作品の全体像を捉えるため、著者であり語り手でもある隆円の語りに着目した。本作品の語りに関しては、『大鏡』を模すとされるばかりでそれ以上の研究はこれまでほぼされてこなかった。『文机談』以前の説話の語り口と比較して、単純に『大鏡』一作品を模しているというよりも、対話形式の作品の流れに含まれるであろうことを述べた。また、隆円の語りや他の語り手や、場、本文中に取り上げられている他作品等によって構築され強化されていることを指摘した。

作品の語りに着目することによって、隆円の執筆の意図、『文机談』成立の背景が浮き上がってきた。すなわち、隆円が師範家存立の危機を憂え、自身の師匠である藤原孝時の流れが正統であることを証明しようとしたことである。この点については以前から指摘されてきたことであるが、『文机談』研究において相承における琵琶の「家」の問題が大きく横たわっていることが改めて明らかになった。

そこで、まず琵琶相承を描く本作品にとって、相承を認める要素の一つとなる秘曲伝授に着目した。秘曲伝来の歴史や、それを語る説話との比較を試み、本作品においては、秘曲に歴史的で伝統的な価値が大きく付与され、さらに簡単には接することのできない恐れ多きものとして描かれていることが分かった。鎌倉時代以降、秘曲はそうした傾向を強くしていき、後には限られた人物にしか伝授されないものとして秘密性を高めていく。本作品は、秘曲の捉え方が変化していく過程の時代にあるものとして考えられ、その様子が見える点は非常に興味深い。

次に、「家」に関わる問題として、中世の家研究を踏まえて本作品における家の概念について考察した。本作品の場合に限らず、伝え継いでいくことが重要な音楽の世界では、「家を継ぐ」という考え方が非常に重要で、その考え方は楽書にも表れている。しかし他の楽書と本作品が異なる点は、著者が音楽の家の人間ではないことである。そのため、著者自身が次の代に継ぐことを述べるのではなく、長く続く家全体を捉えて「家を継ぎ」「七八代続く」という発言を残しているのだと指摘することができる。家の問題に注目すると、隆円が師事した琵琶の家の背景がより一層浮かび上がってくる。隆円の師匠である孝時は、異母弟の孝経との家督争いに敗れており、その後家督は孝時の子孫に戻ってくるのだが、一時は家督を奪われた孝時の不名誉を挽回するために筆をとったという隆円の意図が見える。家、そして家内部での相承の問題から発展して、相承の際の口伝の問題、女性への伝授の問題、家存続のための庇護者となる権力と関わりについても考察した。著者である隆円は「家」存続の重要性も説きながらも、楽道が廃れることへの嘆き、楽道に執心することの大切さにも多く紙幅を割いている。「家」存続の問題のみに支配されてはそれこそが楽道の廃れる一番の原因であり、稽古につとめ芸に執すべきであろうという、隆円の新たな憂いが見えており、単純な家存続への心配に留まらず楽道全体を見通した視点が本作品には描かれていることを示した。

なお、今年度「『文机談』の研究—琵琶の家の物語—」という題で以上の論点をまとめた修士論文を提出した。今年度中の発表とはならなかったが、2011年度中に家と音楽の関わりについて成果を公表することを目指す。

研究成果の概要 つづき

※ この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)